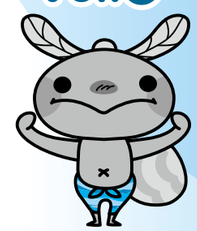
私たちが国東を元気にします

国東の原動力 Vol.11



企業編

石田製綱株式会社 大分工場

国東町川原1662番地
開設▶平成３年４月　従業員▶53名

石田製綱株式会社は、ロープ製造が盛んな愛知県形原町で、漁業用の麻ロープを製造する工場として大正８年に誕生しました。昭和42年に大型船舶時代に対応するため、愛知県のロープ製造業者で結成したクロスロープ工業協同組合に参加し、船舶用ロープの製造。また、時代の流れに合わせて、ロープ素材を合繊素材に一本化する取り組みに着手して事業を拡大させていきました。その後、今までの工場では手狭になり、新しい工場の建設が必要になりました。しかし、愛知県では自動車関連事業が盛んで、工場用地と人員の確保が難しく、海外進出も検討していたところ、取引先の方から国東町の工業用地を紹介され、大分工場を開設することになりました。

▲工場の様子

石田製綱は、ロープ業界のトップメーカーを目指し、３つの取り組みを行いました。１つ目は、高品質のロープ製造するために、材料となる原糸を自社で生産。２つ目は、最大の取引先である水産業の現場の意見を取り入れた「タストン」というブランドを確立。３つ目は、業界初の商品の総合パンフレットを作成しました。その結果、国内トップクラスのシェアを誇るようになりました。現在、大分工場は全体の50％を生産する主力工場の役割を担っています。さらに、３月から主力事業である船舶係留用ロープ等の製造を行うため、隣接地に工場の増設をしており、大分工場の役割がますます重要になっていくとのことです。石田製綱は、これまで同様に、地元に根差した企業を目指して、６月からの増設分の操業に向けて地域の雇用促進や事業活動に積極的に取り組んでいます。

▲ロープを編む本数の変更作業

▲大型ロープを編む機械

▲ロープにフックを取り付ける作業の様子

認定農業者編

◀右から清原益己さん、妻の千重美さん

清原　益己さん 千重美さん

武蔵町麻田
長年にわたってブドウ栽培を営む

清原益己さんが子どもの頃は、農業の景気が良い時代だったので、大人になったら家業の農業を引き継ぐことを決めていました。高校に入学した頃には、父親が参加していた武蔵町の県営パイロット事業のミカン栽培が経営的に厳しくなり、代わりにブドウ栽培の準備を進めていました。そのきっかけは、ブドウ栽培にこの土地が適していると移住し、高品質のブドウを栽培していた方がいたからでした。益己さんは、高校卒業後にブドウについてさらに学ぶために、三重町の県立農業大学校に進学しました。そして、卒業後父と一緒に巨峰栽培に取り組みましたが、妻の千重美さんと結婚したことを機に、２人でブドウ栽培を行うようになりました。２人で協力してブドウ栽培に取り組みましたが、高品質のものを安定して収穫することはなかなかできませんでした。その原因は、巨峰が大きな実になるのは、受粉する時期の気温や湿度が強く影響するからです。そこで、気温や湿度を管理するため、ビニールハウスを建て一部被覆をするようにしました。それからは、安定した品質のブドウを栽培することができるようになりました。そして、今では、栽培面積は１４０アールでハウス50棟に広がり、巨峰約５トンとピオーネ約５トンの計約10トンを毎年収穫できるようになりました。千重美さんは、「ブドウ栽培を２人で頑張ってきたおかげで、息子３人を育てることもできました。これからも２人仲良く続けていきたい」、益己さんは「自分の高校時代は、農業が良くなる時代と言われ、夢を抱いて農業を始めたが、もう今はそんな時代ではありません。しかし、自分が今までお客様に喜んでもらえるように品質にこだわったブドウ作りを、これからもしっかりと続けていきたい」と話していました。

▲芽傷入れ作業

▲芽を間引く作業

林業・水産業編

◀左から斎藤信二さん、妻の志津子さん、息子の一貴さん

斎藤　信二さん 志津子さん、一貴さん

安岐町塩屋
三代続けて漁業を営む

斎藤信二さんは、中学校を卒業してから、父親の照さんと一緒に漁業に取り組むことになりました。そして、奥さんの志津子さんと結婚してからは３人で漁に出るようになりました。今から約30年前、タコ壺漁とキス網漁に、建て網漁を加えました。それからは、３月から７月までを建て網漁、６月から９月をタコ壺漁、10月から３月にかけてはキス網漁を行うようになりました。父の照さんが、安岐地区の漁業運営委員長や町議会議員に選出され、船から降りることになりました。それから間もなく、息子の一貴さんが高校を卒業して漁に取り組むようになりました。１９８０年代後半は、よく魚が獲れ、魚の値段も高く、景気の良い時代を迎えました。しかし、徐々に景気が下がっていき、漁獲量も減っていきました。ここ数年は、主力のタコ壺漁は持ち直しつつあるものの、全盛時の半分ぐらいしか獲れません。このように、漁業を取り巻く状況が厳しい中、昨年の５月には安岐地区の漁業運営委員長に就くことになりました。信二さんは、「今の漁師を取り巻く状況を考えると、明るい材料は非常に少ない。昔あれだけ盛んだった青年部や婦人部の活動も休止している状態であり、息子に後を継がせたが、孫に自信を持って後を継がせる状態にはない。その状態をなんとか打開できるように努力していきたい」、志津子さんは、「漁に出るようになった最初の頃は、いつも船酔いがひどくて、大変でした。今は慣れましたが、体力的に厳しくなってきているので、夫と息子と一緒に漁に出られる残りの時間を楽しんでいきたい」、一貴さんは、「漁を始めた頃のようないい時代がもう一度来るかどうかは分かりません。しかし、将来息子が大きくなり、どんな仕事に就くか考える時、漁師が選択肢の１つとして考えられるように、今は、しっかりと漁に取り組んでいきたい」と話していました。

▲市場に出荷した様子